神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

身体に向かうグローバリゼーション：モンゴル国伝統スポーツの事例より

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 邦子, Inoue, Kuniko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1772

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



身体（からだ）に向かうグローバリゼーション
―モンゴル国伝統スポーツの事例より―

井上　邦子

1　はじめに

モンゴル国は馬頭琴を奏でながら神話等を吟じる口承文芸が盛んな地でもある。そこで語られる英雄叙事詩の中の勇者は、相撲、競馬、弓射の三種の競技（「エリーン・ゴルバン・ナーダム」男の三種の競技）で勝利することで英雄になることが定番となっている。モンゴルの伝統スポーツ[1]――ここでは伝統スポーツの中でも代表的な相撲、競馬、弓射の三種の競技を指す――は、そもそも天に競技を奉納する儀礼を起源とする。その競技に勝利できるということは、天（モンゴルの人々にとって崇拝の対象）に愛でられた人物であることの証なのである。たとえば英雄叙事詩の中の勇者が弓射の競技で、天に向かって放った矢を天界の人物が細工を施し手助けした結果、勝利する場面がしばしば描かれる。天のご加護を受けたゆえに競技に勝利できた勇者は、民衆にも認められ後のリーダーとなっていく――英雄叙事詩が語る英雄は時代が変われども永く人々の胸に沁みこんできた。同時にこのような「三種の競技」に対する考え方――すなわちこれらに秀でることは、天に愛でられ、時代に選ばれた人物である証――も、現在のモンゴルの人々の心性に引き継がれているといってよいだろう。

ただ、モンゴルに特徴的な心性を現代に変わらず受け継ぐ「伝統」スポーツであっても、モンゴル国家が晒される時代の変化を無視しては存在できないことも確かである。「伝統」とは「過去の遺産」ではない。伝統スポーツはむしろ世界の動向に大きく揺さぶられ、変化を迫られるもしくは変化を選択することを繰り返しつつ伝承されてきたといえる。伝統スポーツも他の文化同様に、それが息づく時代の関係性の中で立ち現われるものであるからだ。

かつて天を祀る儀礼であった「三種の競技」は、一三世紀には軍事的色彩を帯びつつ開催されたし、一七世紀にはチベット仏教の活仏の健康を祝う催しとなった。一九二一年に世界で二番目の社会主義国となった後は、勤労者と兵士の体育教育の一環として位置付けられている。二〇世紀末に約八〇年続いた社会主義が崩壊した後の「三種の競技」は、数少ない観光資源として市場経済の一翼を担っている。こうして常に時代の要請に応える形で「伝統スポーツ」は様々な意味を担ってきたといえるのである。

では新世紀を迎えた今日のモンゴル国の伝統スポーツは、どのような局面を迎えているのであろうか。モンゴル国は今から約二〇年前に市場経済を導入し、「世界」へ通じるドアを突如開け放った感がある。そのドアから一気に押し寄せてきたものとは何であろうか。そのひとつに、「グローバリゼーション[2]」と呼ばれる風が考えられる。この語は、現在の〈世界〉を考えるときに避けて通れないキーワードとなっているが、本発表ではモンゴル国の伝統スポーツにおける「グローバリゼーション」の晒され方、それを考えていきたい。

伝統スポーツがグローバリゼーションに晒されるとき、その媒体（メディア）となるものはいったい何であろう。モンゴル国内で最近おこった状況のように、人が突如〈世界〉に接触するという未曾有の経験をしたとき、その関係をまずひきうけるのは、「身体（からだ）」なのではないだろうか。突如、世界の扉から吹き込んできたグローバリゼーションの風は、西欧の論理や資本主義、民主主義のイデオロギーをもたらし、モンゴル文化が持つ〈世界〉認識の再構築化を迫るものであっただろうと想像できる。そうした新たな〈世界〉との関係性を模索し、その関係を担う視座となるのは、単なる意識や精神と呼ばれるものではなく、「身体（からだ）」なのではないだろうか。差し迫った時代の転換点で自らを生きさせようとするとき、それにいち早く反応するのはいのちの場である身体であろう。身体は個人的な思いも担うが、「社会」や「時代」を刻み込むものでもある。その身体の根幹が、伝統スポーツに揺さぶりをかけるのではないだろうか。

そこで本発表においては、グローバル化の風が吹き込む激動のモンゴルにおいて、変化に晒される伝統スポーツについて考えるために、身体の視点から読み解いていこうと思う。「身体」は〈世界〉の中で自らを生かす視座として、時代にいち早く感知、反応し、新たなグローバリゼーションという風を刻印しているはずである。

ではモンゴルにおけるグローバリゼーションは身体に何を刻むのであろうか。

2　空間の観念・移動の論理

モンゴルには、もともと面積を表す固有の単位がないといわれている。遊牧を生業とするこの国の人々にとってそもそも土地は、境界を区切って測量する必要がなかったからだ。モンゴルの人々の感覚では土地は区切られるものではなく見渡す限り広がる連続するものであった。これはモンゴルの人々の空間観念を知る上ではずせない重要な事柄だ。「文明（civilization）」を「都市（city）」から、「文化（cultivate）」を「耕す（cultivate）」から想定してきた西欧人や農耕定住民の我々には想像すら難しいかもしれない。「地を分割しない」のではなく「分割するという想定にない」。両者の間には根本的な意味の違いがある。こうしたまったく別の空間観念に生きているそれが遊牧民だといってよいだろう。

ただ、モンゴル遊牧民の空間観念を、「境界の欠如」という語で一元的にとらえることは、彼らの空間観念の複雑性を誤解しかねない。彼らは土地を連続性の感覚の内に捉えているものの、その土地の利用に関して、決して無計画の放浪生活を営んでいるのではないからだ。夏営地、冬営地など季節ごとに移動する「我が家の空間」は家族ごとに暗黙の了解で決まっている。所有する家畜の規模や地域にもよるが、およそ四〇キロ四方の土地の中で移動している。いくら広大な草原を持つモンゴルの地であっても、遊牧民同士が共存するために土地はある程度区別され、共有されているのである。

しかし自然を相手にする生業だけあって、去年と同様の場所が最良の空間だとは限らない。特に一二年に一度ゾドと呼ばれる大きな雪害が発生するような厳しい自然条件の土地柄である。そうした天災があると家畜の一部だけを他の遊牧民の空間に派遣したり、家畜全体を一定期間だけ越境し、滞在させたりするということも生じる。越境された側の牧民も本来は受け入れるほどの余裕がない場合も多いが、拒否もできないという社会の慣習がある。逃げてきた人を受け入れるという習慣が成り立つのは、次の災害の折には自分が災害を逃げて越境する可能性を想定してのことである。こうした土地のフレキシブリティと相互利用が遊牧民を共存させてきた。普段は生活の住み分けをしつつ、万一の折には土地の境界を無効にすることで厳しい自然と折り合いをつけて、ともに生きてきた人々であるといえる。伝統的なモンゴル人の暮らしにとって土地を分割して所有し明確な境界を設け、他を排除することは、家族や家畜を全滅させることと同義であるのだ。すなわち彼らにとって土地の境界は互いを分断するものではない。むしろ彼らにとって土地の境界は〈分有〉されていると言えるだろう。

土地の連続性の観念と境界の分有。その空間観念を成り立たせているのは、彼らの〈移動〉という行為である。移動することは、何よりも遊牧民の知恵のつまったものである。移動の時期の判断、移動先の草地の良し悪しの見極めが彼らの生を支える。

――「五より上の数を知らない、平原より向こうの土地を知らない」――これはモンゴルのことわざであるが、行動範囲の狭さが戒めの対象となるモンゴル人の心性をよく伝えている。また、「ざぶとんに穴をあけた賢人より多くを周遊した愚人」とさえいう。〈移動〉するものは賢者を超える。「経験が重要であることは人生の真理にほかならない。ただし、その重要な経験という要素をかくも単純に移動そのものにおきかえている点に、移動を是とする遊牧民の思想がうかがわれる[3]」と小長谷有紀は述べているが、彼らにとって〈移動〉することが人生を支える根本の行為であるかのようである。

そうであるならば、移動するということは、遊牧民にとって生業をなりたたせるための技術や手段だけですまされる行為ではないだろう。今福龍太は遊牧民について「遊動する自らの身体意識に刻印される地形や風土の変容の軌跡が、生存や主体性の内実をうめてゆくような生き方だ[4]」と述べている。移動は彼らの生存の根幹にかかわる重要な部分を身体に刻むような在り方だといえる。モンゴルの人々は、移動する行為を共有することで生きてきたし、また移動は彼らの無辺際の空間観念を紡ぎだす行為でもあるのである。

3　土地所有という選択～モンゴルのグローバリゼーション～

モンゴル独特の空間観念と移動の論理――しかし近年、それを真っ向から覆す動きが現れた。今世紀に入り、正確に土地を測量し区切る必要がでてきたのだ。

二〇〇三年五月、ほとんど国会で議論されないまま、「土地所有法」が制定された。この法律は政府案が国会に上程されてから一週間で採択されている。その内容とは、〇・〇七ヘクタールの土地をモンゴル国民家族に

無料で支給するというもので、モンゴル国資本主義政策の最終段階と位置付けられている。これまでモンゴルの人々は、たとえ社会主義時代以前においても、何千年も土地私有をしてこなかった。その人々が「土地を私有する」ことを選択したということは、我々定住民の想像を超えた歴史的転換点であると考えてよい。

そもそも「土地を私有化するということ」とはどういうことであるのか理解できない国民を置き去りに、これが拙速に推し進められた背景には、一方的なアメリカ主導の意図があったといわれている。モンゴル国立大学モンゴル言語文化学部教授でモンゴル在住の村井宗行[5]の見解によると、二〇〇一年エンフバヤル大統領が訪米を果たした折にブッシュ大統領に要請された政策であるという。さらにもうひとつの背景として国際援助機関、および支援国の計画がこの政策に関与していると村井は言う。すなわち、一九九〇年代以降モンゴル国は、各種国際援助機関などから多額の援助を受け取ってきたが、その支援は利子をつけて返済しなければならない。その支援に対して、地下資源を各種援助機関が担保に取る。その地下資源が存在する土地の私有化は、ぜひとも実現しなければならない事情があるというのだ。また同様に小長谷有紀[6]も世界銀行やアジア開発銀行が、貸しつけた資本を回収するための債権を設定する関係上、モンゴルに対して土地の私有化を進めてきた経緯を指摘している。

国家権力よりも国際機関の論理で物事が「世界化」されるというのがグローバリゼーションのひとつの典型であるのであれば、これはまさしくグローバリゼーションを絵に描いたようなモンゴル国内の事例である。こうした国際機関からの圧力とそれに対応する国内の動きを、政府は「歴史的決定である」とその意義を強調している。しかし土地所有そのものの意味を理解できないモンゴル国民の関心は非常に薄い状態にあることは確かなようだ。ただ関心は薄いものの、分割所有される対象となる場所に住む国民は、土地を追い立てられている現状もある。

また、政府は同時に「土地競売規則」を出し、土地取引所を開設している。政府系新聞のオノードル（二〇〇三．五．一）は「国民はすべて数百万、数千万トグログ（一円＝約一五トグログ）の資産がもてる」と宣伝するが、「資産」の意味を理解し、それを持つことを実行できるのは富裕層だけである。現在のモンゴル国においては国営企業の民営化・合理化で雇用機会が激減している国民の失業問題は深刻である。年々、職のみでなく住居を失う人々がマンホールで暮らしていることが大きな社会問題となり、さらに地方の遊牧民が首都ウランバートルへ移住したため、急激な人口増加が深刻化しているというのが現状である。そうした大きな社会問題をかかえるモンゴル国の現状の中で、一部の富裕層の中から土地を買い占め売る者が現れることで、貧富の差が益々拡大しているという。こうしたモンゴル国内におけるグローバリゼーションの流れ込みとそれに影響を受けた資本主義化の政策は、モンゴルの国民にとって、貧富の差の拡大を招くことに他ならない。

ただ問題は、土地売買に絡む利益の不均等を原因とする貧富の差の拡大だけにとどまらない。一方で、もっと根源的なモンゴル独自の伝統的生業形態の崩壊の問題を内包していることも見過ごせないだろう。モンゴル国の場合、土地私有化が推進されると当然、遊牧文化の形態そのものの観念が失われることになる。その遊牧文化の崩壊が実は、もっと根源的な貧富の差の固定化を招いているのである。

すなわち遊牧社会では常識である、財産＝動産であるという観念が崩壊することになるのだ。牧民にとって基本的な財産は動産である。これを小長谷有紀は「動産社会[7]」と呼んで、その特徴をこう記している。不動産の社会ではなく動産社会は、定期的な天災（モンゴルでもっとも恐れられている雪害はおよそ一二年に一度、定期的に見舞われる）で、一千頭家畜を持っていても一〇頭もっていても同じくゼロにリセットボタンが押される可能性がある社会である。気候変動が社会の階層を平準化してしまう。もちろん社会階層や富に関する経済的な格差はこれまでもあったけれども、それが「自然消滅するような機構をそなえている社会だった[8]」。

さらに、遊牧社会すなわち動産社会は、資本主義社会が意味するところの「蓄積」を基本的に持たない社会であるといえるだろう。モンゴルではチベット仏教が一七世紀に本格的に浸透しているが、そのころよりチベット寺院が富の再分配の機能を担っていた。そもそもたくさんの動産を持ちすぎても、それを健やかに育てることができなければ意味がない。そこが貨幣を基本とした財産（貨幣なら持てば持つほど利子を生む）との大きな考え方の違いである。その担いきれない動産、もしくは食しきれない家畜は、寺に寄進され、労働力はあるのに家畜がない牧民に分配されていた

（社会主義時代には、寺の搾取だという理由からこの方法は一時途絶えてしまった）。動産の余剰を囲い込み、蓄積に拘泥することはいずれの牧民にとっても利益とならない。モンゴルでは特に、家畜の乳や肉を消費する市場が近隣にないため動産は余剰を必要とされることなく、「家族が食べる分だけ」維持することが最も営みに合っていた。経済的な格差は、牧畜社会にとってむしろ不便なものという基本理念がある社会なのである。

しかしグローバル資本は、モンゴル国に土地私有化を促した。これは、土地の売買をめぐる貧富の差を推し進めただけでなく、遊牧社会を崩壊させることによって、無制限の「余剰」を持つことの有利性をモンゴル社会に吹き込むことになり、新たな社会階層を作り出し、しかもそれを固定化させることに他ならないのである。

4　グローバリゼーションを刻む身体

モンゴル国が土地所有法を選択したことは、単なる（狭義の）経済の問題にとどまらないことが問題をさらに根深いものにしていると考えられる。先にも述べたようにグローバリゼーションが少なからず影響していると考えられる土地所有の問題は、「蓄積」や「余剰」に関する観念を内包した「自然」と「人間」との関係の在り方そのものを根底から覆す強度がある。このような生の根幹に触れる観念の転換は、これまでのモンゴルの身体観も変容を迫られるのではないだろうか。身体がグローバル化を刻む――モンゴルにおいてそれはどのように描けるであろうか。

①　空間の文節化、境界の固定

自らの生きる空間は無限のもの――土地私有化以降、そうした空間の感覚は、区切ることが可能なものとして再認識されることになる。自らの領域と他者の領域の間には明確な境界が出来上がり、その境界を超えない形で定住することが何より前提になるであろう。そうした境界領域の規定、そしてその強化は一見、国境を無とし富や人の流動性をはかる「グローバリゼーション（世界化）」の動きと相いれないようにみえるが、はたしてそうなのだろうか？

グローバリゼーションとはそもそも、一般的に経済、情報、技術等が国境を越え地球規模に拡大する現象であるように理解される。しかし、実はグローバリゼーションそのものの概念が、分断された国家なり民族なり組織なりが存在することを前提としていて、その固定された共同体を「超える」ことを内包していると伊豫谷登士翁[9]はいう。すなわち境界をなくすのではなく、境界を「越える」という概念なのだというのだ。伊豫谷は、グローバリゼーションの具体的な機能は、個々の国の国家政策を通して実現されるのであって、決して国家政策の有効性が失われるのではないと述べた上で「グローバリゼーションの実践の回路は、いぜんとしてナショナルな場にあるのです。むしろ、多数の国家に分断されていることが、グローバリゼーションの経済的過程を保障してきた[10]」としている。

境界を越えるには、まず境界が必要である。グローバリゼーションの実践は、実は国家の枠組みにおいて施行されている。境界をなくしてすべてを流動化させようというのではない、それが伊豫谷の主張だ。国境は時に「国家間の賃金格差を固定化し、不安定化する雇用の安全弁としての機能[11]」を果たしながら、そこに住む人々を国家に固定しつつ、これまで各々の国家がもっていた経済の主導権だけを搾取する構図がグローバリゼーションの背景に見え隠れする。国家に定住する国民がグローバル経済へ理解を示し、（このようなものがあるのかさえ疑問だが）グローバル文化への消費を促すことを求められるのが、グローバリゼーションの一面にある。同時に、低い賃金の労働力を確保するために、国境が強化されるのである。グローバリゼーションは、境界が前提にある概念であるという伊豫谷の指摘は非常に興味深く、グローバリゼーションが境界に分断され固定化されていることすべてを否定して台頭した議論ではなく、都合のいいところは境界をまたぎ、都合の悪いところでは逆に境界を強化する概念であることが伺える。境界はどこまでも付きまとい、意識化されるのだろう。

モンゴルの土地所有法がグローバリゼーションの要請として行われたのであるならば、境界の設定とその固定化はむしろ「理にかなっている」。同時にかつての境界設定の概念――すなわちよい意味でのあいまいさ――を許さないだろう。モンゴルのあいまいな境界は、先にも述べたように、実は「自」も「他」も明確に区別しないことで両方が生かされる概念であった。モンゴルに土地所有の概念を導入し浸透させようとするということは、「自」と「他」に明確な境界をひき、しかもそこに定住するそうした観念をまずモンゴルの人々の身体に刻印する行為と同義なのではないだろうか。

② 近代的「主体」の立ち上げ

自他が、明確な境界で区切られるということ――そこには自立した「主体」が立ち現れることになるのではないだろうか。しかもそれは、経済的に自立した「主体」であることにより、グローバル経済の中で、制度だけの（制度だけの問題であって実は全く対等の立場にない。一見「制度上の平等」にみえるものは、実はより強固に差異化をもたらす）対等な主体としてモンゴル国民が位置づけられることになる。土地所有法が、世銀等の債権の問題だけならば、土地私有の権利さえ保障すれば事足りる問題である。しかし土地を所有する権利を認めたというだけでなく、〇・〇七ヘクタールずつ必要不必要関係なく強制的に土地を持たされたとなれば、また別の論理が働いているとも考えられるだろう。すなわち経済的な「主体」として国民を立ち上げる意図があるのではないだろうか。「土地の所有」がどのような意味をもつのかさえわからないまま、国民はグローバル経済の舞台に、無理やり「主体」として立たされたということではないだろうか。

この「主体」という概念も非常にモンゴルにおいて、理解しにくい概念であると考えられる。モンゴルでは自然に応じて自らを移動させて成り立ってきた社会である。家畜が草を食べつくす前に移動させることで草原の植生を保護し、天災があれば逃げる。家畜の妊娠、出産等の四季のサイクルにあわせて、人間のくらしのサイクルを決定する。家畜の世話がひと段落したときに人間が伝統スポーツの儀礼を催す。こうした自然主導型の暮らしは、自然との共生を成り立たせるための叡智の行為であり、地球環境に世界が注目するはるか以前から実践されてきた概念である。しかし「近代的主体」という概念からみれば、自然は人間に支配されるものであっても、お伺いをたてるような存在でない。モンゴル国民にとって意味をなすとも思えない突然の土地所有の強制は、実は近代的な意味での自立した「主体」を立ち上げる役割を担っているのかもしれない。自然からの応答で人間の暮らしが立ち上がるような「遊動する自らの身体意識に刻印される地形や風土の変容の軌跡が、生存や主体性の内実をうめてゆくような生き方[12]」は、自己完結する近代的主体へと誘導されるのである。

③ 蓄積＝富である観念への移行

遊牧社会では動産であるという理由から、余剰を持つということは必ずしも富とイコールの概念ではなかった。家族が世話できる程度の家畜が、天災にあうことなく、よく肥え、よい乳をだし病気をせずに、子畜を無事に産むということが牧民にとって望ましいことである。無制限に増える蓄積は、逆に手に負えないものとなる。しかも多くの家畜を手に入れたとて、定期的に天災にみまわれるモンゴルの地にあっては、蓄積がゼロとなる可能性を常に想定しておく必要がある。また、近くに市場となる大きな都市を持たないモンゴル国では、家畜の乳や肉を販売し現金の収入につなげるという発想にもないのである。

しかし、土地所有法が施行された後モンゴル社会が目にしたのは、土地を買い占める力のある者が、蓄積を「独り占め」し、それを元手にさらなる大きな財産（もちろん現金や不動産）を生むという、無制限に拡大する蓄積の連鎖である。こうした現金や不動産の蓄積は、天災によって自然消滅することもなく、信用で取引される。蓄積がある人間ほど、「力」や「信用」を獲得するということであり、それは右肩上がりで富んでいくといういわば資本主義社会の典型的な仕組みである。モンゴル国における土地所有法は、モンゴルの人々の「富」や「蓄積」に関する観念を根底から変えたと言っていいかもしれない。

以上のようなモンゴルにおけるグローバル化――ここでは土地所有がその例であるが――は、これまで無限の観念であった空間を区切り、その一部を「私のもの」だと宣言し、「他者」の空間と明確に分断することによって、その境界内に自らを定着させる。ここでは移動の論理は「過去」のものとなるだろうし、近代論理を逆照射するような有効な移動の論理は崩壊してしまうだろう。そうして他との分断と引き換えに立ち現われた「私の空間」は、経済的主体を立ち上げる場となる。今後、その経済的主体（近代的主体）を前提に、政治、経済、文化の様々な場面が書きかえられることになるかもしれない。さらに自己完結するような「主体」は、自らの権利も主張できるが、自らの不利益も自己責任となる。自然に左右される遊牧の生業が、自己責任の上で成り立つものであるとはとうてい思えない。しかしグローバル化された社会の内では自らが富むためには、「自己責任」

において、蓄積を可算していくしかない。動産から不動産の考え方が進めば、蓄積を持てば持つほど「力」を得ることができる。こうした近代的主体の立ち上げは、さらなるグローバリズム社会を促進させると考えられる。

こうした身体に刻印されるようなグローバリゼーションの動きは、モンゴルが伝統的にもつ身体観の根幹を変化させるようなものであろう。こうした身体観がますますグローバリゼーションを文化に浸透させ定着させる。「世界」を名乗るグローバリゼーションは、経済の一元化を促進するばかりでなく、こうした一様な身体観も世界に同時に広げているのではないだろうか。

5　グローバリゼーションと伝統スポーツ

次にモンゴルの伝統スポーツをする身体に目を向けたいと思う。先にも述べたように、モンゴルの英雄叙事詩の中の勇者は、三種の競技に神のご加護を得たことにより勝利する。それは、技の鍛錬を怠らなかったからでも、肉体的に強靭であったからでもなく、勝利は天の選択であった。

三種の競技に勝利したものが国民の英雄になるのは昔も今も変わらない。現在においても国民の尊敬を一身に集める存在となる。ただ、こうした現代の英雄への道を約束する三種の競技の場であっても、彼らは常にその目標のために日々の鍛錬を怠らず勤勉に稽古を積むという発想にはない。その競技に対する準備の様式は、いわゆる近代スポーツとは異なる伝統スポーツ独特のものであるのだ。三種の競技は七月に催される「ナーダム祭」と呼ばれる祭典で競われるのであるが、ナーダム祭の一〇日ほど前になって初めて、相撲や弓射の稽古を始める。力士や射手は普段、他の職業についているので、もてる時間すべてをトレーニングに費やすという習慣にはない。また競馬のウマにあっては、一〇日前まで乗馬すらできない状態でほぼ自然の状態で放牧されており、一〇日前に初めて群れから人の元につれて来られ鞍や鐙や手綱をつけ、乗馬できるように調教されるという習慣をもつ。ナーダムの競技者（ウマを含めて）は、ナーダム期間に限って「スポーツする」身体となる。これを発表者は、伝統スポーツの「〈移動〉する身体」と呼んでいる。

この伝統スポーツの〈移動〉する身体は、遊牧を生業としてきた彼らのくらしに連続するものであると考えられる。すなわち彼らは、自然に応じた形で一年の暦に従い自らの暮らしを〈移動〉させて生きてきた。自分たちの家族の手で世話できるだけの家畜を維持することを願って、自然に手を加えるのではなく、自然の条件に応じて自らを〈移動〉させ、できるだけ自然に負荷をかけないように共存してきた。

モンゴルの人々にとって七月は、忙しい遊牧作業が一段落するつかの間のひとときである。その七月のナーダム祭の期間、遊牧民（現在は遊牧を生業とする人々は減少しているが）が力士や射手や騎手や調教師に〈移動〉する。そうしてナーダム祭が終わると、もとの仕事に戻り、ウマは再び群れに戻される。七月はナーダムの身体に〈移動〉する時期であり、それが遊牧の暦に組み込まれている。

彼らのそうした身体は、ナーダム祭の時期に限って技を身体に刻印することを繰り返すというやり方である。そこにある身体観とは、過去に蓄積された技の上にさらなる技を積み重ねていくような在り方ではない[13]。身体を常に右肩上がりで向上させていく進歩発展主義的な身体観にはないのであろう。一〇日間のナーダム祭の準備期間は、その時期だけ〈移動〉した身体が伝統スポーツの技の記憶を呼び覚ます期間だ。本質の固有性を保持せず、過去の蓄積を固着させることをしない流動的な身体のかたちなのである。

こうした伝統スポーツの身体の成り立ちは、資本主義が導入されて以来大きな変化をみせている。特に相撲は大会に賞金制度を導入し、これまでナーダム祭が年に一度の大きな競技の機会であったものが、毎週末に賞金試合を行うようになった。一九九七年には「ブフ（力士・相撲）・リーグ」が開催されるようになり、一〇〇を超える企業がスポンサーとなり、企業が力士を抱えるようにもなった。そうなると相撲は生活の糧になる。これまでいわゆる「プロ」の力士は存在しなかったが、企業が力士を抱え賞金試合が通常となると「力士」が職業のカテゴリーに移行することになる。

現在のモンゴルでは地方の遊牧民が都市に集まり急激な都市化が大きな問題となっている。社会主義時代には機能していた遊牧民の組織（ネグデル）が急激な民営化により機能を失い、草原の暮らしが都市と分断され、遊牧民が草原で暮らしていけない状態が起こっている。結果、そうした草原に暮らす人々が職のないまま都市に押し寄せているのが現状なのである。そうした人々にとって力士は魅力的な職である。モンゴルの男性ならだれ

でも相撲経験があり得意技の一つや二つはもっているこの国で、プロ力士の急増が見受けられるのも無理からぬことだろう。

そうした生活がかかるプロの力士は、日々のトレーニングは不可欠なものとなるのは当然のことだ。これまで力士は、仕事の合間に練習をすることはあっても、いわゆる不断のトレーニングを積むというレベルではなかった。ナーダム前でさえ、一〇日間ほど技の確認や身体ほぐしをする程度であった。それが、日々、肉体を鍛えることが不可欠となったのだ。当然、身体観も変わるだろう。努力すればするほど、身体と生活が向上する。昨日の自らの身体の上に、さらに今日の鍛錬の結果を可算するのだ。その努力が富みを生む。身体の技は、過去の身体の上に進歩発展的に積み上げられるのだ。

モンゴルで、モンゴルの遊牧や自然環境に合わせたかたちで、身体文化も築きあげられてきた。その一つが伝統スポーツであろう。伝統スポーツをする身体もまた〈移動〉する。自然を主体とした暦のサイクルの中に、伝統スポーツも位置づき、それに応じて競技を行う。一年に一度スポーツする身体に〈移動〉する、それがモンゴルの伝統スポーツの儀礼なのだ。それが今日、グローバリゼーションの名の下に、境界の固定、自然まかせでない近代的主体の立ち上げ、不動産の蓄積という西欧的な観念が、急速に国内に広がっている。それは当然ながら、身体文化にも影響を及ぼし、ひいては伝統スポーツが変化する。スポーツする身体は、〈移動〉するものではなくなった。日々、身体をトレーニングし、過去の自らの身体に今日の技を定着させていく。身体もまた右肩上がりの蓄積が前提になるのだ。そうした今日の身体観は、ナーダムを益々グローバル化していくことになるだろう。すでにナーダムにドーピング検査が導入されている。ナーダムもグローバルスタンダードをとりいれるといわんばかりに伝統スポーツにもグローバル化の波はとどまることがないのである。

6 おわりに

文化の中の身体の在り方は、地域や時代によって実に様々な「かたち」をもって、いままでもそしてこれからも多種多様に生きている。そのなかでモンゴルの身体は遊牧のくらしから生まれた〈移動〉する身体であると発表者は考えている。

では現代に生きる我々の身体とはどういうものだろう。日々の努力を怠らず、勝利や成功に向かってまい進する身体を理想としてはこなかっただろうか。他者との境界を明確にすることによって自己完結する主体を確立し、何事も自己責任のもとで「腰を落ち着けて」打ち込む。ゆるがない日々の努力は身体を進歩発展させる。そうした努力の結果蓄積された財産、技術、信頼は我々をさらなる幸福へと誘う——そういう幻想を抱いてきた。こうした理想の身体はスポーツだけでなく、就業や教育、軍事、市場経済、医療などの分野でも目標とされる身体であるといえるだろう。

しかしそれが今ここにきて、その理想の身体が大きな悲鳴をあげているのではないだろうか？そうした近代的身体の非流動性、主体性に限界がきていることは、ほかでもない身体がいち早く気づいているようである。こうした「悲鳴をあげる身体[14]」に〈移動〉する身体が問題を提起してくれるのではないだろうか。われわれが今後、「最後の自然」といわれる「身体」を生きるために、ここで改めて考えてみる必要がありそうだ。

ただ現在において、モンゴル国にはグローバル化の流れはすでに入り込んでいる。ここで述べたように、〈移動〉する身体は大きな転換点にきているといってよいだろう。その是非をここで主張するつもりはない。ましてや近代化を望むモンゴルの人々の思考を否定するつもりもない。ただ、モンゴルの身体がグローバル化される以前の〈移動〉の身体の意味を今一度再考し、われわれ定住を常識としてきた者が、まったく気づかない身体の位相を考え直してみたいと思うのだ。

〈移動〉の身体は、実に重要なことを我々に示唆してくれる。それがグローバリゼーションの名のもとで、一様な身体を強制することになっているのであれば、非常に残念なことである。文化の中の身体とは実は、多様なものである。そうした多様な身体観から、自らの身体観を顧み、生き方を考え直す機会は是非とも必要なものである。にもかかわらず、それが身体の「一元化」が世界規模で組み替えられることになるのであれば、それは大きな損失である。ましてやグローバル化の名のもとに「西欧の論理」の枠組みに絡みとられることがあればなおさらである。

そもそもひとつの身体観が、それが誕生した地を離れて、関係のない地の身体にそれを根付かそうとするのは無謀なことなのではないだろうか。文化特有の身体観とはそれが生まれた場所と不可分のものであるはずだ。

身体は地の記憶を担っている。もし、いかなる文化にも民族にも信仰にも歴史にも普遍化できるような身体観があるのだとすれば、それは「生きた身体」ではなくなるはずだ。

加えて、そうしたグローバリゼーションが自らの意思で選択したものではなく、他国の論理や何らかの国際組織からの圧力で進められたとすれば、グローバリゼーションは大きな暴力になりかねない強度を持つだろう。もしモンゴルにおいてグローバリゼーションが暴力として働くのであれば、それに絡みとられない身体の論理が立ち現われなければならない。そう、今こそ〈移動〉する身体の出番なのである。

註および引用・参考文献

1　「伝統スポーツ」という語を本発表ではモンゴル伝統の相撲、競馬、弓射の「三種の競技」を指して用いているが、さらに高度に標準化された国際スポーツや近代スポーツとの対概念として用いており、地域性、儀礼性を特徴とし、一般的に近代スポーツよりも古い起源をもつスポーツと定義して用いている。加えて、モンゴル国では「三種の競技」は「ナーダム（遊び、競技）」と呼ばれ、バスケットボールやバレーボールなどの近代スポーツはロシア語を援用したかたちで「スポルト」と呼び分けられている。すなわち当該文化では「ナーダム」と「スポルト」は明確に区別されているといってもよい。それにもかかわらず「三種の競技」を「スポーツ」と呼ぶことに疑問を感じないわけではないが、他地域の「伝統スポーツ」との比較を可能にする意味でも、本論では広義の意味で「スポーツ」――一般的な意味での「スポーツ」のみならず遊びや舞踊、武術なども含めた広い概念――の語を用いることをはじめに断わっておく。

2　現在、「グローバリゼーション」もしくは「グローバル化」等の言葉の概念には諸説あり、明確に定義することは困難であるが、本発表で用いる「グローバリゼーション」の指し示す概念を示しておきたい。本発表では、一九六〇年代より経済（多国籍企業による世界経済の支配、資本の国際的流動等）政治（国家支配の衰退とＩＭＦやＷＴＯなど国際的組織の役割の増大、紛争への世界的関与等）、文化（各国文化の欧米化、アメリカ化等）、環境（環境問題の地球規模化等）などの場面で、地球規模化を特徴とするような社会的状況を意味することとまずは定義しておきたい。

3　小長谷有紀『モンゴル風物詩』、東京書籍、一九九二年、九〇頁。

4　今福龍太「移動民の系譜学」、『遊牧民の建築術ゲルのコスモロジー』、ＩＮＡＸ出版、二〇〇〇年第二版、八一頁。

5　モンゴル在住に在住するモンゴル国立大学モンゴル言語文化学部教授の村井宗行は、インターネット上で（http://www.aa.e-mansion.com）モンゴルの社会状況を詳しく報告している。

6　ＮＨＫ教育テレビ二〇〇二年一〇月一一日放送の「視点・論点」の中で、「モンゴルとグローバリゼーション」について小長谷有紀が語っている。

7　小長谷有紀「モンゴル遊牧民における伝統のグローバリゼーション」『立命館言語文化研究』一六巻三号、立命館大学言語文化研究所、二〇〇五．二号。

8　前掲7、二一頁。

9　伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か～液状化する世界を読み解く』、平凡社新書、二〇〇二年。

10　前掲9、一一一頁。

11　前掲9、一一一頁。

12　前掲4、八一頁。

13　身体能力は当然経験の蓄積と全く切り離して考えられているわけではない。一〇代で水汲みをしたときに胸筋が鍛えられたことによって相撲が強くなったなどという言説はしばしば見られる。ただ、このように勝利の原因として過去の経験が想起されても、水汲みは相撲のために行ったのではない。近い未来の目標のために（すなわち試合の勝利）今の蓄えを築き上げるという心性にはないのではないかと考える。

14　鷲田清一『悲鳴をあげる身体』、ＰＨＰ新書、一九九八年。

・　モリス・ロッサビ『現代モンゴル――迷走するグローバリゼーション』、明石ライブラリー、二〇〇七年。

・　小長谷有紀編著『遊牧がモンゴル経済を変える日』、出版文化社、二〇〇二年。

・　長沢孝司ほか著『モンゴルのストリートチルドレン――市場経済化の

嵐を生きる家族と子どもたち』、朱鷺書房、二〇〇七年。

※なお、本研究は平成24年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C課題採択番号１２００３６８０）の研究成果の一部である。
また本論は、「神戸市外国語大学・バスク大学第２回国際セミナー」抄録集の原稿に加筆修正したものである。